

おバカトリオ、ここに爆誕

おさかべ姫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

特にありません。いつもの突然の思いつきです。

# 目次

おバカトリオ、ここに爆誕

## おバカトリオ、ここに爆誕

昼下がりの喫茶店シャノワール。今日は開店以来、コーヒー杯で居座り、店の奥の方の席でただひたすらに彼氏とだべっていた。互いに店の雰囲気と流れる音楽に身を任せ、随分とリラックスしている。ぼーっとするのも飽きたので、何気ない話題をイブの方からふる。

「イブたちのバンドで、一番頭いいの誰だろ？」

すると、彼氏は顎に手をあて、考える仕草をする。

「うーん：普通に考えたらまあ霜月さんかな」

「いやあのさ、勉強うんぬんというよりかは地の頭？ってやつだよ」

「ああ、ならいい質問知ってる。」

「まじで？どんなん？」

「うし、じゃあ春日さん呼んでくれる？」

「おけ。咲子ー、おいでー」

ひらひらと手を振り、メイド姿の咲子呼び寄せる。

「はい、何でしょう？」

「いまからコイツが咲子に質問するから、答えてあげて。」

「はいっ、分かりました！」

「ゴホン、では問題です。」

「テレン！」

「：一舞、そういうのいいから。」

「テンションアゲアゲでいくしー！」

「へいへい：では改めて。【あなたのお父さんとお母さんから生まれた子供で、あなたの兄弟でも姉妹でも、双子でもない人は？】」

咲子は床を眺めて数秒、ぽんと手をうち、回答した。

「うふふ、それは【私】ですね♪」

「おおつ、さすがだね春日さん。」

「へー、なるほどねえ。」

「な？いだろこれ」

誇らしげな目の前の男は、口角をあげ、イブにグーサインを送る。

「わかった、イブ、他の3人にも聞いてくる！」

そう言ってイブは、シャノワールを飛び出し、手始めにサウダージへ向かった。

勘定をあいっぴりに押し付けて。

「おっじやま〜」

「むつきゅん！いぶぶいらっしやいめう！今、まりりと撮りためたアニメメをしちよーちゅーめう！」

「……ゆるゆり？」

「可愛い女の子たちがたつくさん出てくるんだよ！」

くソンナコトイウヒトニハバッキンバッキンガムヨー

「ぶふふお……っ」

「ん？イブどうしたの!？」

「……なんでもフツ…フツ…ない……クハア」

「ありりー？これはかんっぜんにツボってるめう…」

こんなセンスのないダジャレなのに、なぜだか笑いが収まらない。イブはお腹を痙攣させ、床を叩いた。

「そりで、こたびはどのようなごようなりか？」

「…フー、そうだった。あんた達に質問があつてさ。【あなたのお父さんとお母さんから生まれた子供で、あなたの兄弟でも姉妹でも、双子でもない人はだーれだ？】」

「えっ、んとんと………難問さんだよお…」

ふたりは途端に頭にはてなマークを浮かべ、腕を組む。そして数十秒後、めうがこう切り出した。

「めう、りんりん先生のところへ……じゃなかった、ちと外のくーきをすって考えるめう〜」

「わ、私も行ってくる！イブ、留守番お願いね！」

「あーこらちよつと！逃げんなし！」

しかしふたりはイブの静止も聞かず、家の外、もとい霜月書林へと向かった。そしてイブは部屋にぽつんと取り残された。

「ふう……仕方ない、ゆるゆり見るか。」

アツカリーン アカリハココダヨー

「凜ちゃん、凜ちゃん！」

「レコード屋にハンコ屋……どうしたのかしら。私は今、ヒストグラムから考察しうる経済動向の理論構築で忙しいのだけけど。」

「いぶぶがちよーぜつ難易度高レベルのなぞなぞを出してきためう！秀才りんりん先生の手助けが必要めう！」

「あのね、『あなたのお父さんとお母さんから生まれた子供で、あなたの兄弟でも姉妹でも、双子でもない人は？』っていう問題なんだけど……」

すると凜は即座にこう答えた。

「何かと思えば愚昧な……答えは【私】よ。早く洋服屋の元へ戻って頂戴。」

「さっすが凜ちゃん！ありがと様様だよ！」

「ななな……そんな言葉には惑わされないわよりピート屋っ！」  
「べっつにまりりはなんもしてないめう」

……百合展開のわからない筆者でスマヌ。

ソレナラアンシンアンコールワットネー

「プツ……ククック……」

やはりこの、杉浦綾乃というキャラクターのギャグが自分のツボのようだ。どうしても笑いが止まらない。

…しかしこの船見結衣という女の子、他人の気がしないなあ……  
そこへ、ドタドタと、階段を駆け上がる二つの足音。まり花たちが  
戻ってきたようだ。

「イブー答えわかったよ！」

「そう、じゃあ言ってみ。」

「うんー！じゃあめうめう、行くよ！」

「らじやーめう！」

「せーのっ！」

「『答えは【凜ちゃん！】』」

イブは文字通りズツコケた。どこか抜けてるこの2人だが、頭はい  
いものだと思ってたのに。流石のイブでも、少し呆れてしまった。

「全く……どうしようもないわねー。」

「ええー。違うの!?がっかりだよお……」

「あーめう……」

「なんであんた達、こんなこともわかんないわけ？」

イブはため息混じりにこう吐き捨てた。そして、やんわりと、この  
2人のおバカさんに答えを教えることにした。

「答えは【咲子】だよ！」

ソソナワケナイナイニアガラヨー

結果報告のため、イブは再びシャノワールを訪れる。

「ただいまうってあいつは？」

「私と2人だと間が持たないからって、イブちゃんが出たあとすぐに帰っちゃいました。それで、まり花ちゃん達はもうでしたか？」

「みーんなだめ。まり花とめうはどもつちやって、凜から答え聞いたみたいんだけどそれも【凜】っていうので大ハズレ。正解は咲子だけだったよ。」

「え……。あ、そ、そうなんですか……。」

咲子は、正直面食らった。

「このぶんどと、頭の良さ勝負はイブと咲子の一騎打ちになりそうだし！」

「あ、そ、そうですね……。」

いつもなら、「私よりもイブちゃんのほうがいいですよ♪」というところだが、今日の彼女は……

確実に「おバカ」だった。